

二〇二〇年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第二回 二月二日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やカッコなどもすべて一字に数えます。

つぎの日、病院に行くと、ベッドは空だった。兄ちゃんは、リハビリに行っているらしい。

キャビネットの上の色紙を手にとった。昨日きちんと立てかけたのに、またふせられていた。

「治ったら、160キロが投げられるぞ」

「がんばれ第二のダルビッシュ」^{*}

甲子園^{こうしえん}、日本のプロは当たり前、めざせ大リーグ^{メジャー}

兄ちゃんへのメッセージがびっちり書いてある。クラブのチームメイトからのお見舞^{みま}いだ。

兄ちゃんは、この色紙をどんな気持ちでふせたのだろうか。

悔^{くや}しかったのだろうか。それで、もう見たくないのだろうか。島田くんも同じ気持ちなのだろうか。

試合のスタメンが発表されてから、島田くんはおれのことを見ない。あいさつをしてもシカトされるから、思いこみじゃないだろう。

きっと、おれになんか任せられないと思っっているんだ。昨日も、おれのコントロールはさんざんだったから。連打を浴びた上に、

何人にも盗塁^{どろるい}されて、大量点をとられた。

「そんなんじゃ、今度の試合、負けるぞ」

練習中、きこえてきたやじの中に、いらだったような島田くんの声も交じっていた。

① 色紙を元のようにならせたとき、

注

*ダルビッシュ……プロ野球選手で、現在はアメリカの大リーグで活躍^{かつやく}する投手。

*スタメン……「スターティングメンバー」の略。競技で試合開始時の出場選手。

「健、また来てたのか」

兄ちゃんの声がした。リハビリを終えて帰ってきたようだ。

「家でも、自主練くらいできるだろう」

家の庭には、古タイヤがつるしてあるし、壁にマットもはってある。バッティングも投球練習もいつでもできるから、兄ちゃんは
不服そうだ。

「つぎの試合は、投げるんだろう」

「……、自信がない」

おれは、兄ちゃんから目をそらした。

「本当はおれなんかより、島田くんが投げた方がいいんだ」

ほそつと続けるおれに、兄ちゃんはさとすように言った。

「島田の気持ちを考えてみるよ」

「考えなくてもわかるよ」

おれは言葉をはき捨てた。

「きっと島田くんは、おれみたいなへぼがかわりをつとめるのがいやなんだ。③
まずいと思ったけれど、言葉はすでに出てしまっていた。」

「おれがってなんだよ？」

兄ちゃんがつつかかかってきたので、ついむきになって、声を荒げた。

「だって、自分のかわりを達也さんがやるのが不満なんだろ。自分より実力がないやつが、かわりをやるのなんて、面白くないもんな。それでいらついでるくせに」

顔がかつと熱くなる。兄ちゃんの顔も、またたく間に赤くなった。

古賀先生が黙^{だま}ってこちらを見ていた。今野さんもテレビを見ながら、ちらちらおれらを気にしている。江本さんのカーテンは閉じられていたが、みようにひっそりとしているのは、きっと様子をうかがっているのだろう。

兄ちゃんは返事もせずに、目を閉じた。静かに深い呼吸をはじめ。マウンドでピンチを迎^{むか}えたときにやるように。そして無言でベッドによじ登り、マンガを読みはじめた。

「帰れ」

とは言わないが、話をする気もないんだろう。マンガ本で顔をかくしている。

みぞおちのあたりが熱かった。どうしようもないことをぶちまけたものの、すっきりしないものが、腹の中⁷でくすぶっている。

いたたまれなくなったおれは、腰^{こし}をあげた。ベッドに背をむけ、窓の外を見る。

④ 空は分厚い雲でおおわれていた。今にも雨が降ってきそうな灰色の雲が、低い位置までたれこめている。雲の合間を、カラスが数羽、すいこまれるように、飛んでいった。

と、ふいに鼻がつんとした。しょっぱいような匂^{にお}いがしたのだ。首をひねったとき、今度はへんな音をきいた。すこっ。

ガラス窓は閉められているのに、外からラムネのふたを開けるときのような音がきこえた。

「あれ？」

さらにおれは声をあげた。空の分厚い雲が、ぽこんと丸くぬけたのだ。

「どうした？ UFOか」

古賀先生の声がした。

「いえ、穴です」

そうとしか言いようがない。しかも穴がぬけたところからは、強い太陽の光が放たれていた。

「雲に穴が開きました」

おれが言ったときだった。腹の底からばね仕かけみたいに飛び出してきたものがあつた。

「ぐおおおんっ」

自分でも初め、それが声だとはわからなかつた。それとともに、目からはなみだがほとぼしり出た。おれはきゆうに泣きはじめたのだ。

「ど、どうしたんだ、健」

シカトを決めこんでいた兄ちゃんが、**A**を丸くしている。

「あれ」

おれは、泣きながら空を指さした。兄ちゃんは不思議そうな目で、おれの指の先を見た。

と、つぎの瞬間。しゅんかん

「ぐぐぐうああああん」

今度は自分のものではない泣き声が、きこえてきた。ごう音。兄ちゃんの声だった。見ると、ギャグマンガでよく見るように、両方の目から、ホースで水を飛ばすみたいになみだが飛び出している。

「うわあっ」

その出方はすごくて、おれは自分が泣いているのも忘れたくらいだ。生まれてこの方、こんなになみだを流す人を見たことはなかつた。とにかく出る。兄ちゃん自身も、自分ではどうしようもないのか、どこかきよんとした顔だ。古賀先生がうしろからやってきて、おれたちの顔をのぞきこんだ。

「どうしたんだ？」

「わかりまへん」

おれは目を見開いたまま、首をふった。兄ちゃんもなみだを流しながら、首をひねっている。

「もしかして」

古賀先生は、おれらの顔を交互こうごに見た。

「最近、泣きたいのをがまんしていた？」

注意深い声でたずねた。

「はい」

「しました」

⑤ おれはうなずき、兄ちゃんもそう答えた。

「試合のスタメンが発表されてから、ずっとです。島田くんがよそよそしいのもいやだったけど、それよりも、弱っちい自分が情けなかった。でもそれだけじゃない」

おれは腹の中にあつたものをぶちまけた。今までストッパーがかかっていたみたいに出不かった言葉が、こみあげるように出てきた。

「巨大きょだいな兄ちゃんの存在がいやだったんだ」

なにかにつけ比べられるのは、なれていたはずなのに、ここにきて兄ちゃんの存在が一気に重たくなっていた。

「お兄ちゃんに、少し近づいたからじゃない？」

お母さんは言ったけど、おれは不安でたまらなかつた。

泣きながら話すおれのとおりで、兄ちゃんも泣きながら話しはじめた。兄ちゃんの話はおれのより、ずっと長かった。なにしろ野球をはじめたときにまでさかのぼっている。

四年生にして、初めて先発を任されたときの緊張。五年生の試合でフォアボールが続いて、押し出しになりそうになったときの恐怖。六年生のときには、成長痛で、こ関節が痛くてたまらないのをがまんして投げていたそうだ。なかなか今回のことが出てこない。

「投手ってのは、孤独なんだな」

古賀先生も、^①神妙な顔をしてきいていた。

「もちろん、このけががいちばんつらかったです」

やっとけがのことが出てきたが、そのつらさは、おれが思っているのとは少し違うものだった。

「治るかどうかも不安だったし、治ったところで、チームに居場所があるのかとも考えた。でもいちばんは、大好きな野球がなくなるかもしれないってことでした」

兄ちゃんのなみだ声に、おれは顔をあげた。

兄ちゃんがいやだったのは、達也さんが自分のかわりをつとめることではなかったのだろうか。

「健、さっきの話だけだな」

兄ちゃんは、言った。

「最初は、達也の先発はおもしろくないという気持ちもあった。と、いうよりも、いろんな気持ちをごちゃごちゃしていて、わからなかったんだ。でも、ひとつずつ、余分なものを取り除いていったら、最後にひとつ残ったものがわかった。それがおれの本当の気持ちだった」

「それはなに？」

なみだ声でたずねるおれに、兄ちゃんのなみだ声がかえってきた。

「野球が好きだ、ということだ」

「……」

「おまえも、心の中から余分なものを追い出せ」

「余分なもの？」

「不安とか、^{*}自ぎやく的な考えとか。思い出したら、自分がいやな気分になるものは、ぜんぶ余分な気持ちだ。それをみんな追い出して、残ったものが本当の気持ちだ」^⑥

兄ちゃんの言うことは、わかるようでわからなかった。姿や形のない気持ちが、どうしたら本当かなんてわかるのだろう。だが兄ちゃんは、そんなおれの疑問を見すかすように言った。

「本当の気持ちはすぐにわかる。いちばん強いからな。それに従って、がんばれ」

それをきいたら、またやけに泣けてきた。

おれは、本当に、野球が好きなのだろうか。

いつまでも泣きやまないおれたちを見て、

「やっぱ、なみだの穴かな」^X

古賀先生がきみのような言葉を口にした。

「なみらの穴？」

おれはききかえした。

「穴みたいの、見なかった？」

おれはこくんと首を縦にふった。

注 *自ぎやく的……必要以上に自分を責める様子。

「雲にとつぜん、丸い穴が開きました」

「おれも見まひた」

兄ちゃんも言う。

おれは窓を指さし、穴を見つけた場所に目をやった。

「あ、もうない」

穴は消えていた。雲はいつのまにか形を変えている。それを見たたん、なみだは引っこんだ。しゅるんと音をたてて、きつぱり引っこんだ。

兄ちゃんを見ると、同じことが起こっていた。なみだの形跡けいせきもない。

「やっぱりか？」

古賀先生は思案するように **B** をかしげた。

「あの話は本当だったのか？ まさかな」

「なんっすか、それ」

今野さんが、松葉づえをついてやってきた。

すると、シャツと音がして、開かずのカーテンが開いた。

江本さんだ。

おれは息を飲みこんだ。江本さんがのっそりと出てきた。

初めて見た江本さんは、雪男というよりも、どこかの県のゆるキャラみたいな感じだった。興味があるのか、ベッドをおりて、はうようにしてやってくる。

「その話、詳しく教えてもらえますか？」

「いいとも、こほん」

古賀先生は、嬉しそくに咳ばらいをした。

「これは学校で聞いた話だけだな」

そう前置きをして、古賀先生は話しはじめた。つい最近のことだったらしい。クラスの児童がふたり、校庭のすみに掘った穴をうめていたそう。近寄ってみると、ふたりとも泣きはらした目をしていた。

「そのうちのひとりは、動物係だったからな。先生はピンときた。動物の墓をつくっていたんだな、と。だから、深く追及しなかった。考えてもみてごらん。小学校五年生といえば、多感になってくるころだ。人前で泣いているところなんか、見られたくないだろうからな」

古賀先生はわけ知り顔で言った。

「で、そのときはなにもきかずに、自分の胸の中だけにおさめたよ。だけどびっくりしたのはそのあとだ」

「どうしたんすか」

「子どもたちが帰ったあと、その穴を掘りかえすことにしたんだ」

「えっ、動物の死体がうまっている穴をですか」

江本さんは、おどろきと期待が混じり合ったような顔をした。古賀先生はそんな興味本位な表情をいさめるように、しかめつづらをしてみせて言った。

「そうだ。うめられた穴は、こんもりとした山になっていて、いかにもなにかがうまっているという感じだったからな。だれかが掘りかえしてしまったらショックを受けるだろう。トラウマになっちゃいかん。第一、不衛生だし。ところが、だ。掘っても掘っても、出てこないんだよ、なにも」

「動物が消えたのか？」

「ホラーだ」

「もともと入ってなかったんじゃないすか、それ」

おれはおどろき、江本さんは目を輝かせ、今野さんは

C

。「先生もなにがなんだかわからなかったよ。それで、穴を掘っていたふたりにたずねてみたんだ。そしたら、なみだの穴をうめてたつていうじゃないか。まったく子どもの発想力ときたら……」

先生が嬉しそうに、説明してくれたところによるとこうだった。なみだの穴は通常、海の上のどこかにあるらしい。それが風に流されて、あちこちに現れることがある。普段なみだをがまんしている人がその穴を見ると、泣けて泣けてしかたなくなる。やがてまた、穴が移動してしまうと、なみだはうそのようにピタッと止まる。

「さんさん泣いたあとは、気分がすっきりするそうだ」

「なんすか、それ」

今野さんはばかりしそうに鼻を鳴らし、

「けっきょく、いい話か」

江本さんは興味をなくしたのか、またはうようにしてベッドにもどった。

だが、おれは兄ちゃんと顔を見合わせた。そして、ふたりでうなずきあった。それはたった今、自分たちが体験したことそのものだったからだ。

今、おれの心はせいせいしている。それは兄ちゃんも同じだったみたいで、すがすがしい表情だ。

おれはベッドのはしっこに座った。さっきの兄ちゃんの話の思い出して、心の中をさぐってみる。不思議なことに、あんなにめちゃくちゃしていた気持ち、すっきりとしていた。なみだといっしょに、余分な気持ち、ぜんぶ出てしまったのだろうか。

おれはひとつ息をはいた。胸の奥で、なにかが目ざめたような気がした。

おれはそれを、自分に言いきかせるように、口に出した。

「おれは、野球がやりたい」

がぜん、力がわいてきた。

「おれもだ！」

兄ちゃんも太い声で言った。その目が熱く燃えていた。

(まはら三桃『なみだの穴』)

問一 ～～～～線㉞「くすぶっている」・～～～～線㉟「神妙な」・～～～～線㊱「見すかす」とはどのような意味ですか。もっとも適当なもの

のを次の1～4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

㉞「くすぶっている」

㉟「神妙な」

㊱「見すかす」

- | | | |
|------------------|-----------------|----------|
| 1 抑えようとしても隠しきれない | 1 普段とはちがいかしこまった | 1 見かねている |
| 2 細かくくだけで散らばっている | 2 相手の気持ちをさぐるような | 2 見通している |
| 3 徐々に増えて底にたまっていく | 3 同情してやさしくなくさめる | 3 見回している |
| 4 なくなりきらずまだ残っている | 4 おどろいてすっかり感心する | 4 見誤っている |

問二 A・B にあてはまる体の一部を表す漢字一字をそれぞれ書きなさい。

問三 線㉠「色紙を元のようにふせた」のはなぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 けがをして思い通りの投球ができない「おれ」の気持ちもわからずいらだちをぶつけてくる周囲に対して、悔しさを抑えられなかったから。
- 2 スタメン争いに敗れた悔しさからか「おれ」のことを無視する島田くんの存在を再び思い出してしまって、不愉快だったから。
- 3 はげましの言葉が書かれた色紙を見たくないのか、「おれ」が病室にかざってもそのつどふせてしまう兄の気持ちを思いやっただから。
- 4 兄がチームメイトからもらった大事なお見舞いの色紙を、「おれ」が勝手にさわったり見たりしたことがばれてしかられるのをおそれたから。

問四 ———線②「兄ちゃんは不服そうだ」とありますが、このときの「兄ちゃん」の気持ちを三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問五 ———線③「兄ちゃんだってそうなんだろ?」とはどういうことですか。このときの健の気持ちを説明した次の文の

I

Ⅲ にあてはまる言葉の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

試合に出られなくなった I が実力が下の自分に投手を任せるのを不満に思っていることと、けがで出場できなくなった

Ⅱ が実力が下の Ⅲ に投手を任せるのを不満に思っていることを重ねている。

1 I 島田くん II 健の兄 III 達也さん

2 I 健の兄 II 島田くん III 達也さん

3 I 健の兄 II 達也さん III 島田くん

4 I 島田くん II 達也さん III 健の兄

問六 —— 線④ 「空は分厚い雲でおおわれていた。今にも雨が降ってきそうな灰色の雲が、低い位置までたれこめている」とありま

すが、この部分を説明したものとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 分厚い雲が少しずつ低くなっていくことで、自分の思いが「兄ちゃん」に伝わらないもどかしさを示している。もどかしさが少しずつ増していき、なにもできずに落ち込んでいる状態を灰色の雲であらわし、その悲しくてなにもできない状態を雨が降ること示している。

2 何度も自分の思いを「兄ちゃん」に届けようとしているのに、「兄ちゃん」を目の前にすると自分の思いとはちがうことばをなげかけてしまうひねくれた自分の性格を分厚い雲で示している。雨が降っているうえに雲がたれこめていることで自分の性格を反省し、雨は先が見えない状態であることを示している。

3 分厚い雲は「兄ちゃん」そのものであり、自分をおおおうようにのしかかっていることを示している。分厚い雲が低い位置にたれこめたことから、「兄ちゃん」をどうにかしたいと思いはじめたが、どうしたらいいのかわからないために、泣きじゃくっている状態であることを示している。

4 分厚い雲と灰色の雲は、これまでずっと「兄ちゃん」に対してがまんしていた悔しい気持ちを示している。雲でおおわれていることと雲が低い位置までたれこめていることから、悔しい気持ちがいつそうのしかかり、また、雨が降ってきそうであることから、泣きそうな状態であることを示している。

問七 —— 線⑤ 「おれはうなずき、兄ちゃんもそう答えた」とありますが、「おれ」と「兄ちゃん」の泣きたい理由は異なっています。

もっとも大きな理由を中心に二人の心情を、次の文の I・II にあてはまるように、それぞれ二十字以上二十五字以内で書きなさい。

「おれ」は I。

それに対して、「兄ちゃん」は II。

問八 ――線⑥「本当の気持ち」とありますが、「おれ」の「本当の気持ち」とはどのようなものでしたか。「〜という気持ち。」に続くように、文中の「おれ」の言葉から五字以上十字以内でぬき出しなさい。

問九 C にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ほくそえんだ
- 2 ほほえんだ
- 3 せせら笑った
- 4 愛想^{あいそ}笑いをした

問十 ――線X「なみだの穴」について、先生と生徒が次のように話しています。生徒Bはどのように答えましたでしょうか。
にあてはまるように七十字以上八十字以内で書きなさい。

先生 「なみだの穴」とは結局どのようなものだったのでしょうか。あなたたちはどう思いますか？

生徒A 私は、「なみだの穴」とは普段泣くのをがまんしている人を見ると自然に泣けてしかたなくなるものだと思います。

先生 そうですね。「なみだの穴」には一体どんな効果がありますか。あなたにとっての「なみだの穴」とはどんなものか具体例をあげ、それによってあなたがどう変化したのかを説明して下さい。想像でも構いません。

生徒B そうですね。私にとっての「なみだの穴」は 。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

「二〇世紀とは、どんな時代でしたか」とたずねられたら、みなさんは何と答えるだろうか。僕は躊躇なく、「コンクリートの時代でした」と答える。

それほどに、コンクリートという素材と、二〇世紀という時代は、相性がびつたしただただたのである。びつたしただただただけではなく、コンクリートという素材が、二〇世紀の都市を作り、国家を作り、文化を作った。その産物の上に、今も僕らは暮らしているのである。二〇世紀のテーマはインターナショナルイズムでありグローバルイゼーションであった。ひとつの技術で世界を覆いつくし、世界をひとつにすることがこの時代のテーマであった。物流、通信、放送、あらゆる領域でグローバルイゼーションが達成されたが、建築、都市の領域で、それを可能にしたのがコンクリートという素材だったのである。

A ^②コンクリートは場所を選ばない。木の薄い板を組み立てて型枠を作る程度の技術は世界中どこにでもあったし、コンクリートの構成材料である砂、砂利、セメント、鉄筋は世界中どこでも入手可能であった。型枠の中に鉄筋を組んで、砂、砂利、セメントを流し込めば、それまでである。鉄骨の建築も、二〇世紀の産物ではあるが、鉄骨造はコンクリートに比べれば、はるかに難易度の高い、高度な技術であった。

(中略)

しかも、この素材は、場所を選ばないという^{*普遍性}のみならず、どんな造型をも可能にするという、もうひとつの普遍性、別の言い方をすれば自由を有していた。型枠の作り方を変えるだけで、どんな曲面も自由に作れるし、もちろんストレートでシャープな骨組みを作ることも簡単である。

(中略)

しかも、この形の自由さにプラスして、表層の自由というオマケもついてくる。豪華で、お金がかかったふうな建物にしたい時

は、コンクリートの上に薄い石を貼り付けなければならない。ハイテクっぽく、未来っぽい味付けをしたい時には銀色でシャープなアルミの板を貼ればいい。自然派、エコロジー派を気取りたい時には、木の板を貼り付けたり、珪藻土を薄塗りすればいいのである。

これは学生が描く図面だけの話ではなく、実際の建築の施工の実情である。僕らをとって囿む建築物のほとんどは、そのようにして、コンクリートの上のいろいろなお化粧をすることで、できあがっている。コンクリートは強くて、その上に何かを取り付けるのが、最も簡単な建築素材である。こんなお化粧ノリのいい材料は、他にない。その意味でも、最も普遍的な材料であり、それゆえに、あらゆるデザイナーの、あらゆるテイストに対して、コンクリートは自由に対応可能であるし、ローコストなものから高級建築まで、あらゆるグレード、コストに対しても、コンクリートは見事に、そのお化粧で対応するのである。

(中略)

それほどに圧倒的な普遍性があり、しかもコンクリートはめっっぽう強い建築素材でもある。地震にも強い、火事にも強い、虫に喰われることもない。そんな万能の素材が、二〇世紀に普及しなはずがなかった。普遍的であるとは、場所を選ばないということであり、また建築のテイスト（シンプルなものからデコラティブなものまで）、種別（住宅からオフィスまで）を選ばないことであり、しかもどんなコストにも対応できるということである。

B、場所を選ばないということは、逆に言えば、あらゆる場所をコンクリートというひとつの技術、その技術の裏にひそむ単一の哲学によって、同一化してしまうということである。そして、場所とは自然の別名に他ならない。多様な場所、多様な自然が、コンクリートという単一の技術の力で、破壊されてしまうのである。またテイスト、種別、コストを選ばないということは、逆

注 *躊躇なく……ためらうことなく。

*インターナショナルリズム……国と国との、または国民と国民との親和や協力を望ましいとする考え方。

*グローバル化……経済・文化などが国境をこえて、世界的規模に拡大すること。

*普遍性……すべての物事・場合にあてはまる性質。

*デコラティブな……かざりたてられている。

にいえば、多様な表面のお化粧のうしろ側には、コンクリートという単一の揺るぎない本質がひそんでいるということに他ならない。そのようにして、自然の多様性が失われただけでなく、建築の多様性も失われたのである。④二〇世紀とは、そのようなさびしい時代であった。

C コンクリートの「強さ」についても、その「強さ」の質についても、われわれは注意深く、見きわめなくてはならない。コンクリートは突然にかたまるのである。それまではドロドロとしていた不定形の液体であったものが、ある瞬間、突然に信じられないほどかたく、強い物質へと変身を遂げる。その瞬間から、もう後戻りがきかなくなる。コンクリートの時間というのは、そのような非連続的な時間である。⑤木造建築の時間は、それとは対照的である。木造建築には、コンクリートの時間のような「特別なポイント」は存在しない。生活の変化に従って、あるいは部材の劣化に従って、少しずつ手直しし、少しずつ取りかえ、少しずつ変化していく。

逆な見方をすれば、二〇世紀の人々は、コンクリートのような不連続な時間を求めたのである。そのようにして、不定形なものを固定化することに、情熱を燃やしたのである。たとえば核家族が住み始めたための家を建てることに、二〇世紀の人々は懸命になった。二〇世紀の経済を下支えしたのは、「持ち家」への願望である。従来の地縁、血縁が崩壊し、近代家族という孤立した単位が、大きな海を漂流しはじめたのが二〇世紀であった。近代家族という不確かで不安定な存在に対して、何らかの確固たる形を与えるために、彼らは住宅ローンで多額の借入れをしてまで、家を建て、家族を「固定」しようとした。あるいはコンクリート製のマンションというかたい器のなかに収容することによって、存在の不安定を「固定」しようとした。地縁、血縁が崩壊したことで不安定になってしまった自分を、コンクリートというがちがちのもので再びかためたいと願ったのである。

同様に、国家も、自治体も、あらゆる共同体が、コンクリートによる固定化で明確な「形」を獲得することによって、その存在の不安定を、解消しようとした。解消したつもりになるうとした。「ハコモノ」とは、そのようにして作られた、かたい建築の別名である。そういう人々の欲求にコンクリートは、最適の素材であるかに見えたのである。

しかし実際には、不安定なものほど、うわべの固定化によっては救われない。不安定なものもつとも必要としているのは柔軟性^{じゆうなんせい}のほずである。固定化は不安定なものに不自然な足枷^{あしかせ}をはめるだけである。あるいは、コンクリートによる固定化は、もはや誰も^{だれ}が必要としていない無用の存在としての共同体に対する、さらなる不必要な出費であった。コンクリートとは消えゆく不安定なもの達の、断末魔^{だんまつま}の叫び声である。

(隈 研吾『自然な建築』)

注 *断末魔……死にぎわ。

問一

A

C

にあてはまる言葉の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 A また

B そして

C なせなら

2 A また

B たとえば

C あるいは

3 A まず

B しかし

C さらに

4 A まず

B また

C しかし

問二

線①「コンクリートの時代」とはどういうことですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

い。

1 コンクリートという素材が鉄骨に取って代わり、より高度な技術での建築が可能になった時代。

2 世界のあらゆる都市の建物を、コンクリートというひとつの素材によって作ろうとした時代。

3 物流や通信、放送技術などのあらゆる領域において、コンクリートが不可欠であった時代。

4 木造建築からコンクリートの建築へと、またたく間に町並みが変わっていった激動の時代。

問三

線②「コンクリートは場所を選ばない」とはどういうことですか。三十字以上四十字以内で書きなさい。

問四

——線③「コンクリートは見事に、そのお化粧で対応する」とはどういうことですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 コンクリートは型枠の作り方を変えるだけでどんな形も自由に作れるため、学生でも思い通りの外見の建物を簡単に作れると
いうこと。

2 コンクリートは取り付ける材料を変えるだけで、豪華な建物にも安価で手に入りやすい価格の建物にも簡単に作りかえられる
ということ。

3 コンクリートは上に塗る素材を工夫することで、近未来的なシャープな雰囲気ふんいきにもエコロジーで自然な雰囲気にも変幻自在へんげんだ
ということ。

4 コンクリートは表面に貼り付けるものを取りかえることで、どのような雰囲気にもできるしコストを調整することもできると
いうこと。

問五

——線④「二〇世紀とは、そのようなさびしい時代であった」とありますが、「そのようなさびしい時代」と筆者が言う理由
を四十字以上五十字以内で書きなさい。

問六

——線⑤「木造建築の時間は、それとは対照的である」とありますが、「木造建築の時間」と「コンクリートの時間」はどの
ようにちがいますか。次の文の I・II にあてはまるように、それぞれ三十文字以上四十文字以内で書きなさい。

「木造建築の時間」は

I

 時間である。それに対して、「コンクリートの時間」は

II

時間である。

問七 —— 線⑥「家族を「固定」しようとした」とはどういうことですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 地縁、血縁が崩壊し不安定になった近代家族を、「持ち家」に住むことで安定させようとしたということ。
- 2 度重なる地震で不安を抱いている家族に、強固な住宅を建てることで安心感を与えようとしたということ。
- 3 大家族から核家族に変化したため、古くなった家を強固なコンクリートで作るかえようとしたということ。
- 4 核家族化した近代家族が、安心して住めるコンクリート製のマンションを増築しようとしたということ。

問八 —— 線⑦「不安定なものをもっとも必要としているのは柔軟性のはずである」とありますが、これと異なる例を次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 進路を迷っていた時、両親や先生、友だちが自分では思いもよらない選択肢をいくつもあげてくれたので視野を広げられ、その結果自分でも納得のできる進路選択ができた。
- 2 友だちともめた時に必要なのは、どちらが悪いかを決めつけることではなく、どちらにも相手に対して少し思いやりが足りなかったのではないかと考えてこれからの関係性を良くしていこうとする態度である。
- 3 仕事で疲れている母にとって、毎日の料理や掃除などの家事が負担になってつらそうだったので、家族全員で曜日を決めて分担するようにしたところ、母の笑顔が増えて家の雰囲気もよくなった。
- 4 下級生がクラブ活動の準備をすると、最初は不慣れで時間がかかってしまうが、スポーツ精神を養う意味でも、根気よく何度もやらせる方がよい。

問九 本文の内容にあてはまるものを次の1～5から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 コンクリートと同じく二〇世紀の代表的な建築法である鉄骨造は、技術的にも金額的にもコンクリートと大差ないが、建築の自由度において大きく劣る。
- 2 共同体は、利便性に優れ人々に安定感をもたらすコンクリートを素材とした建築物を作ることになったが、思い通りの効果は得られず期待外れに終わりがちであった。
- 3 コンクリートは造型の便利さから、最初は主に学生が図面を形づくる時だけに用いられる技法であったが、その後、実際の建築の施工現場で用いられるようになった。
- 4 建築材料としてコンクリートを中心に使用した建築物は、一軒家を建てる時でも巨大なビルを建てる時でも、同様の手法を取るため工期に遅れずに進めることができる。
- 5 コンクリートを用いた造型方法としては、型枠を作り、それに沿って組んだ鉄骨の内部に砂と砂利などの原材料を流し込むという、きわめて複雑なやり方に特徴がある。

三

次の1～6の——線のカタカナは漢字で書き、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 雑誌をソウカンする。
- 2 助けてもらったオングを感じる。
- 3 周辺諸国がセンセン布告する。
- 4 たくさんありすぎてマイキヨにとまがない。
- 5 荷物をアズかる。
- 6 兄は画家を志している。

問題は以上です

二〇二〇年度 入学試験解答用紙〔国語〕(五〇分)

第二回二月二日実施
吉祥女子中学校

受験番号
氏名
得点

問一	ア
イ	
ウ	

問二	A
B	

問三	
----	--

問四	
問五	
問六	
問七	
問八	
問九	
問十	

問五	
----	--

問六	
----	--

問七	II	I
問八	25	25
問九	20	20

問八	
問九	という気持ち。

問九	
----	--

問十	
問一	
問二	
問三	
問四	
問五	
問六	
問七	
問八	
問九	
問十	

問一	
問二	

問三	
問四	
問五	
問六	
問七	
問八	
問九	
問十	

問四	
----	--

問五	
問六	
問七	
問八	
問九	
問十	

--

問六	II	I
問七		
問八		
問九		
問十		

--

問七	
----	--

問八	
----	--

問九	
----	--

--

4	1
5	2
6	3

--